

## 芥川龍之介「湖南の扇」論

周 倩

### 一、はじめに

「湖南の扇」(一九二六年一月「中央公論」)は芥川龍之介の中国旅行四年後に創作された短篇小説である。発表された当時、「出来損ひ」(一九二五年一月三日付 斎藤茂吉宛書簡)や「仕舞の方が出来損つてゐる」<sup>①</sup>など、芥川自身は度々不満を漏らし、同時代評も芳しくなかった<sup>②</sup>。

本作は、「僕」が長沙での旅行見聞を回想する「過去」の部分とプロローグ及び結末の「現在」の部分から構成されている。作者と思われる「僕」は、プロローグの部分で、「黄興」、「蔡鍔」、「宋教仁」など湖南出身の革命家を挙げ、「湖南の民自身の負けぬ気の強いこと」を提示している。後、旅行当時の「僕」の視点で、ある「小説じみた小事件」を語りだしている。しかし、二人の「僕」の間に時間的な隔りがあるだけでなく、旅行地長沙へ差した眼差し及びそこで遭遇した「小事件」に対する認識にも亀裂が潜んでいる。つまり、本作には旅行当時の「僕」と現在回想している「僕」という二つの視点が存在している。

また、旅行当時の「僕」は、言語と文化の二重の疎外を受けて、限られた情報のみで旅行地を体験したため、幾つか不可解な謎が残った。現在の「僕」はそれを回想しながら、当時の体験に取捨選択のフィルターをかけ、諸要素を意識的に配置し、謎の内実を暗示しているのだと考えられる。その謎の中心人物は「僕」の案内人を務めた友人「譚永年」で

ある。彼をめぐる論には、「日本の帝国の侵攻に、その脅威と、商業主義的利権ゆえに甘んじなければならぬながら、同時に深い憎悪を内蔵していた、当時の中華民国の体制側」に通底しているとの指摘<sup>③</sup>や芥川の創作「手帳」に残された「戊戌の變。譚嗣同。詩的。畢永年。僧になる。哥老会。」のメモから、革命者譚嗣同と畢永年を参考にして造型されたという論<sup>④</sup>が挙げられる。しかし、譚は自ら「僕」を迎えに来たのに、「僕の見送りに立たなかつた」のはなぜか。留学時代誰にも「悪感を与えたこととはなかつた」彼は、玉蘭を苦しめたのはなぜか、など、「譚永年」をめぐる謎には先行論ではまだ論じきれないところがある。

そのほか、本作の草稿の結末部に「扇」をめぐる描写は一切ないが、定稿では「扇」に関する描写を書き加え、首尾照応の形で「扇」の存在をより印象的に描き出しているのはなぜであろうか。本作の発表された半年前に、佐藤春夫は台湾を舞台にした「女誠扇綺譚」(一九二五年五月「女性」)を発表した。また、「湖南の扇」と同じ時期に塩谷温の主宰で、中国古典文学の翻訳シリーズ『支那文学大観』が刊行され、孔尚任の『桃花扇』も翻訳され、収録されている。右記の二作で、「扇」はいずれも重要なメタファーとして使われている。それでは、本作における「扇」はどのような意味合いがあるのか。芥川は本作を創作する際、「扇」のモチーフを取り扱った「女誠扇綺譚」と『桃花扇』から、どのようなヒントをうけたのだろうか。

本稿では、まず旅行当時の「僕」のまなざしを検討し、「僕」の人物造型の特徴を明らかにする。そして、譚永年の形象を考察し、彼をめぐる幾つかの謎を解いてみる。また、芥川文学における中国女性像の系譜のなかで、本作に描かれた中国女性表象の特徴を析出しながら、「扇」の象徴性も明確にする。

## 二、旅行当時の「僕」の眼差し

長沙に上陸した当時の「僕」は、目に映った風景及び感想を次のように語っている。

高い曇天の山の前に白壁や瓦屋根を積み上げた長沙は予想以上に見すばらしかった。殊に狭苦しい埠頭のあたりは新しい赤煉瓦の西洋家屋や葉柳なども見えるだけに殆ど飯田河岸と変らなかつた。

飯田河岸は明治二〇年代に新設された明治期を起源とする河岸で、明治以降のわずかな期間で急速に開発された。一八九五年に甲武鉄道の飯田町駅が開業し、飯田河岸は鉄道と舟運の結節する物流拠点として隆盛していた。つまり、飯田河岸は近代東京都市空間の発展の一環として、成立した近代化・工業化の河岸空間である。それに対して、一九〇四年『長沙通商口岸租界章程』が結ばれ、同年の七月一日長沙は通商租界として開港された。それ以降、西洋列強の勢力がこぞって入り、領事館・教会・外資系企業など洋風の建物が相次いで建てられた。その過程において、長沙の伝統的な都市空間も、近代化された。内発的にせよ、外圧的にせよ、長沙の近代化につれ、現地の伝統的な風景が失われ、他者と自我（この場合は長沙と東京であるが）の差異は不可避的に解消していく。本

来の「異国的な風景」を求めにきた旅行者にとっては、目の前の風景は失望にしか映らないのも当然であろう。

風景に幻滅した「僕」は、その後、現地の民衆に対する軽蔑の感情を次の一節で顕著に語っている。

すると薄汚い支那人が一人、提籃か何かをぶら下げたなり、突然僕の目の下からひらりと棧橋へ飛び移った。それは実際人間よりも、蝗に近い早業だった。

日清戦争以降、中国をめぐる言説によく見られる軽蔑的なまなざしが、「僕」にも引き継がれ、再生産されている。また、「殊に一人の老紳士などは舷梯を下りざまにふり返りながら、後にいる苦力を擲つたりしていた」と現地民衆の苦痛を見つめつつ、長江を遡って来た「僕」の見慣れた風景として、「僕」の苛立たしさを高めるだけであった。このように、民衆を見下ろし、民衆の苦痛に無関心な「僕」の姿にはプロローグに見られる湖南民衆の情熱への思いとの間に、分裂があると言えよう。そして、「僕」は旧友譚永年の不快を予期しながら、「土匪の斬罪」の話を持ち出す。

一九一七年一月三日付文夫人宛書簡に、芥川は山本喜譽司からもらった匪賊斬罪の絵葉書について、以下のような記述がある。

兄さんがこの間満州から匪賊の首を斬る所の画はがきをくれました。斬つてしまつた所です。満州は野蛮ですね。

日本では、一八七九年一月四日梟首刑が廃止され、一八七九年一月三日高橋お伝が市ヶ谷の刑場で斬首されたのが斬首の最後となる<sup>5)</sup>。しかし、

斬首に対する猟奇的な趣味は、長い間流行していた。また、「野蛮」というイメージと結び付けられ、この刑罰を保持する国の後進性と野蛮性を照らし出し、同時に日本の文明開化を照射するメカニズムとして、度々取り上げられた。「内心長沙の人譚永年の顔をしかめるのを予想」しながら、あえて「斬首」の話をだす「僕」の行為には、猟奇的な心理の動きがあり、一種の文化的優越感を持ち、中国人の譚永年を揶揄しようとする意図もあると考えられる。

ただし、「僕」の心情は「僕」の接した風景と旅行体験の変化によって、常に変貌を見せている。翌々日、麓山寺や愛晩亭へ見物に出かけた「僕」の目に兩岸の風景が鮮やかに映り、「僕等の右に連つた長沙も白壁や瓦屋根の光つているだけにきのうほど憂鬱には見えなかつた」のである。麓山寺が二六八年に建てられた仏寺で、湖南仏教の発源地でもある。愛晩亭は一七九二年、羅典によって建てられた江南四大名亭の一つとされている。杜牧の名句「停車坐愛楓林晚」に因んで、命名された。「僕」の心情の変化はこうした古典的な空間への期待と無関係ではない。一方、「日本人は一人も見当らなかつた」埠頭の空間とは違い、現在の「僕」は在留日本人から「中の島」と呼ばれている三角洲を左にし、「日本領事館」と「日清汽船会社」などで作り上げられた擬似共同空間に向かう。したがって、「僕」の上陸当初の苛立ちも一掃されていた。

しかし、このような安らぎも「湘南工業学校」への参観によって、以前遭遇した「或女学校」での「烈しい排日的空気」を喚起することとなり、不安へと引き込まれていった。このモチーフは作者の実体験に裏付けられている。『支那游记』（改造社 一九二五年一月）に収録された「雑信一束」「七 学校」において、芥川は長沙の天心第一女子師範学校並びに附属高等小学校を参観した際の見聞を紹介している。当地の女学生は皆排日のため、日本産の鉛筆などの文房具の使用を拒否し、筆で幾何や

代数をやっていたという。こうした光景の背後に潜むのは、湖南民衆の革命の決心と強烈な革命情熱であるが、「僕」は、無論その背景には無關心である。後、妓館で局票に書かれた女性達の名前を見ながら、「それ等はいずれも旅行者の僕には支那小説の女主人公にふさわしい名前ばかりだつた」と古典文学に描かれた〈支那趣味〉の典型的な女性像で、現実の中国女性を把握する姿勢を取っている。旅行当時、中国の社会状況に目を向けようとしない「僕」は、譚永年、玉蘭達の言動を理解するための回路を閉ざしたのである。

一方、妓館で譚が「こんな迷信こそ国辱だね」と言い捨てながら、「人血ビスケット」を取り出した際、僕は「それは斬罪があるからだけさ、脳味噌の黒焼きなどは日本でも嚙んでゐる」と述べた。日本では「脳味噌の黒焼き」が「梅毒」や「肺病」などの「妙薬」として長い民間で密かに流行し、死体の脳味噌を密売する事件が度々起こっていた<sup>⑥</sup>。この習俗を取り扱った明治以降の記事から、それを「迷信」、「野蛮」として批判した文脈が確認できる。そのなかで、「人間の首を売買するといへば阿弗利加内地の探検談の如く」とし、「兎にも角にも文明国における一大怪事にして、我が同胞の一大汚点を発見せし<sup>⑦</sup>」を嘆いた記述もある。文明国の国民としてはふさわしくない、未開地民衆にありうる行為として、その習俗を位置づけたのである。

実際、明治大正時代の新聞記事や旅行記に、近代中国の迷信性を訴える記述も度々見られる。その文脈において、迷信に囚われるものを蒙昧者として軽蔑し、あるいは啓蒙すべき存在とした。このイデオロギーは、当時の日本の海外進出を正当化するロジックにおいても使われていた。しかし、本作の「僕」は文化批判の立場で「血のビスケット」の習俗を批判することなく、むしろそこから自国との同一性を見出している。この意味では、彼は古い俗習を持つ国の民衆を啓蒙すべき対象として捉え

る当時のイデオロギーと違う考え方をしていたと言える。ただし、「僕も嚙んだ。尤も子供のうちだつたが。」の一句が示すように、「僕」の考えには一種の懐古的な感情もある。

このように、「僕」は〈支那趣味〉に感溺していた旅行者として造型された。「僕」の〈支那趣味〉は観察対象の持つ強い現実感と葛藤し、現実には屈折しながら、結局得体の知れない、空虚なる「無気味」感へと変貌したのである。

### 三、中国知識人表象——譚永年の造型について

文化と言語の二重疎外を受けた「僕」の旅行体験は、案内兼通訳の譚の導きのもとに築きあげられたとも言える。留学時代、日本人との寄宿舎生活中、誰にも悪感を与えず、順従な姿を演じた譚永年は、今回「僕」の旅行を支配する「強者」として立ち現れる。従来の先行論に看過されたが、譚の留学経験の設定は意味深い。

譚は「僕と同期に一高から東大の医科へはいつた留学生」と設定されている。芥川は一九一〇年に一高に入學し、一九一三年東京帝国大学文科大学英文科に進学したのであるが、それを鑑みれば、譚も同じ時期に日本に留學していたと想像できよう。日清・日露戦争後、中国人に対して友好的感情を抱いた人も勿論いたが、日本国内では中国人に対する軽蔑の感情が広まり、侮辱事件が度々起こり、留学生達の反発を引き起こしたのである。また、連戦連勝で国民感情が増長してくるにつれて中国人を露骨に軽侮するようになり、留学生に対する態度もつめたくなつた。日露戦後まもなく清国留学生取締規則事件が起こったほどである。<sup>⑧</sup>それに対する留学生側の反応として、事件に対する憤怒から、大森海岸に投身した同盟会の発起人陳天華の「憤死」はあまりにも有名であろう。

ところで、当時の留学生はどのような教育をうけ、またどのような生活を送っていたのであろうか。一九一九年六月東亜同文会が発行した「支那留学生状況調査書」によると、当時多くの学校では中国人留学生を対象に「精神科目」を設置し、校長もしくは教官が講話して、個人道徳・国家関係・処世法などを「涵養セシメアリ」とある。また、「排日騒擾」を起こした留学生の強制帰国（東京高等師範学校）、あるいは「監獄二入レラレタル者」（第一高等学校）もいたのである。こうした状況のしたで、譚の「愛想のよい」は彼の性質によるものとは考えにくく、むしろ屈辱や抑圧を感じながら、自ら感情を抑制し、本音を隠した行為と理解してよからう。

そして、意識的と思われる譚が「案内地」とした場所からも彼の真意が読み取れるであろう。彼の案内にまず出てくるのは、日本の海外進出の拠点にあたる日本領事館と日清汽船会社である。特に、日清汽船株式会社は一九〇七年三月、日本郵船、大阪商船、湖南汽船会社及び大東汽船株式会社の四社によって設立され（資本金810万円<sup>⑩</sup>）、政府の介入と支援もあり、長江流域への資本進出を積極的に行っていた。その後、譚がすぐに「張継堯と譚延闓との戦争」の話を持ち出し、張の部下の惨死振りを語っている。関連の記述は芥川の「手帳6」にも見られるが、「張継堯」は張敬堯の誤りである。一九一八年三月から一九二〇年まで、督軍兼省長として湖南を統治していた軍閥張敬堯は、経済略奪、言論統制、日本帝国の権力を保護するために学生の排日運動を弾圧するなど、湖南民衆に憎まれた存在である。一九二〇年六月一日、張は湘軍の攻撃を受け、岳州へ逃走したが、その動乱のなかで、日清汽船の武陵丸は長沙で掠奪を受け、長沙出張中の大津來徳が張の弟張敬湯に似ているため、湘軍に殺害された。この事件が、当時日本国内の新聞に「長沙事件」あるいは「湖南事件」として、頻繁に取り上げられていた。したがって、

この記事を挿入するのは、張の敗北と部下の惨死を語る行為を通して、譚の中に潜んだ帝国日本の中国進出及び帝国の権力に屈服する軍閥勢力に対する憎しみを浮かび上がらせようとしたのであろう。

また、「僕」に土匪斬首の話突き付けられた時、譚は「僕」の予想通りではなく、「もう一度愛想の好い顔に返つたぎり、少しもこだわらずに返事をした」箇所はどのように解釈すればいいのか。近代中国における土匪団体（秘密結社）の多くは、清朝打倒運動をその底流として生じたものである。その代表的なものとして、青幫・紅幫があげられるが、芥川のメモにある「哥老会」は紅幫の一つの流れで、華中、長江流域を中心に活動した。彼らは反清運動に動員され、重要な役割を果たした。同時に、酒井忠夫氏が指摘するように、「阿片戦争後、先進列挙の汽船による運輸業の進出と外国商品の流入が、中国の民族経済に大きな打撃を与えた。そのため、各地の「流氓」の勢力が増大し、民衆の排外意識をたかめた」のである。<sup>⑩</sup>

つまり、土匪団体には革命的な側面があり、時には排外勢力の一派でもある。芥川の手帳に、「日清汽船の傍、中日銀行の敷地及税関と日清汽船との間に死刑を行ふ。刀にて首を斬る。支那人饅頭を血にひたし食ふ。――佐野氏。」との記述があるが、人血饅頭の話は人血ビスケットに変えられ、玉蘭の物語の核となっている。しかし、先行論では「中日銀行の敷地及税関と日清汽船との間に死刑を行ふ」の箇所あまり注目していない。黄六一の斬首を創作する際、この箇所の記述が芥川の念頭にあったのであろう。おそらく黄六一はただの「悪党」ではなく、排外運動にも参加した一員であり、それが原因で斬首されたのかもしれない。「土匪」の内実について、青柳達雄氏は、「匪」と称される人の中に「革命者」も少なくないと述べ、尾崎秀実の『現代支那論』の記述を引き、「土匪群の共産主義への流れ込み」の可能性を提示している。<sup>⑪</sup> 溝部優実子氏はその

研究を受け、黄六一の処刑の日は五月九日の国恥記念日であると指摘し、黄には「反体制的な色彩」が強いとしている。<sup>⑫</sup>

このように、「張継堯と譚延闓」の南北戦争と土匪の斬首の話はいずれも「日本領事館」「日清汽船会社」という空間と緊密な繋がりを持っている。さらに、譚が「湘南工業学校」を參觀させたことも意識的な行為だと考える。芥川の「手帳6」に「湘南公立工業学校」としてメモされているが、正確には嶽麓山にある「公立工業専門学校」である。この学校は、国貨維持と日貨排斥運動を高揚していた拠点の一つである。運動を推進するため、工專の学生達が「湖南麓山学校工廠」の建設を提案し、実現の運びになった。<sup>⑬</sup> この背景に注目すれば、譚の提案は「単なる嫌がらせを越えて、自国の自負を内在させた所以であり、強固な自国意識と対抗意識に支えられていた」という溝部氏指摘は適切であろう。つまり、譚が「僕」を案内してくれたのは、帝国進出と現地民衆の反抗活動の激しく交錯する空間であった。意図的にそれを「僕」に示して見せようとした譚も、排日的な側面を持つていると言えよう。

また、譚永年は「武勇話」のような土匪黄六一の生涯を「殆ど黄六一を崇拜しているのかと思う位、熱心にそんなことを話しつつづけ」ながら、黄の情婦であった玉蘭に会った時「殆ど仇にでも遭つたやう」になり、わざと黄の血を染み込ませたビスケットを玉蘭に食べさせたのはなぜであろうか。譚が語った黄六一の話には、作者芥川の愛読していた緑林物語『水滸伝』の投影もあると考えられる。また、本作が発表される一年前に刊行された長野朗の『支那の土匪と軍隊』で、土匪の親分について、「唯の物取り強盗でなく種々の風変りの分子が含まれ、間には傑物も少なくない」とし、「この乾分と親分との関係はどうかと云ふに、日本の侠客の親分乾分に似たものである」と語っている。さらに、「土匪道德の真髓は義にある。然諾を重んじ、義侠のためには命も抛げ出す、仲間の間や土

匪団の間柄は信義で凝まつて居るので、そこには嘘も偽りもない」と土匪仲間義侠心を称えている。<sup>⑦</sup> 大阪毎日新聞社の北京特派員波多野乾一はこの著書の発行人であり、彼もまた芥川の北京滞在中の案内人である。したがって、芥川がこの本を読んだ可能性も否定できない。黄六一は、まさに長野の記述と軌を一にしている義侠心を持つ存在である。また、「歩兵を射倒した」など、反体制・反秩序側の人間として造型されたのである。譚は黄六一から自分と共通している革命精神を見出し、憧れを持っていたのかもしれない。

一方、黄は「湘譚の或商人から三千元を強奪した」との話もあるように、裕福なブルジョア層とは対立した人間である。「長沙にも少ない金持の子だった」譚永年は従来の官紳階級の人で、黄とは対立関係があると推測できる。そのため、譚が黄と黄の情婦玉蘭に敵意を持つことも、妓館で玉蘭と含芳を苦しめたのも自然であろう。ただし、人血ビスケットを食べる迷信を「国辱」として厳しく批判しながら、あえて「僕」の前でこうした文化の裏側を晒け出そうとしたのは、一種の自虐的な行為として理解でき、単なる階級的敵意に集約できない側面もある。「僕」の旅行計画をした譚は、案内地、見物の内容及び「僕」に会わせる人すべてを把握している。血のビスケットを玉蘭に食べさせることも、彼の計略だと考えられる。「わたしは喜んでわたしの愛する……黄老爺の血を味わいます」という玉蘭の衝撃の言葉を「逐語訳」した際、譚は「テエブルに頬杖」をついたという呑気な姿勢を取ったところから、譚は玉蘭の行為を予想としたりうえで、その「いじめ」をした可能性が高い。譚は、この自虐的な行為を通して、「情熱に富んだ湖南民衆の面目」と反抗精神を「僕」に伝えようとしたのではないか。

一方、留学時代誰にも悪感を与えず、優しかった彼は、妓館で下層民衆をいじめ、あるいは支配しようとした行為を通して、自分の上位性を

示している。日本にいた時の弱者に、権力を振る強い側面があり、順応したものも、いつか反抗していくことを、譚永年という人物形象によって語っているであろう。

#### 四、「扇」のメタファー

「湖南の扇」における物語の中心は妓館で起こった「小説じみた小事件」であるが、この「小事件」に関わる二人の登場人物―玉蘭と含芳の人物造型を検証することも、本作の主題を考察するうえで不可欠である。先行論で指摘された通り、本作の物語空間は、芥川の中国各地での体験や見聞がある意図のもとに再構成したものである。<sup>⑧</sup> また、妓館の描写は上海妓館での体験を彷彿とさせる。上海体験を記録したメモ「萍郷、京調の党馬」<sup>⑨</sup>「秦楼、西皮調の汾河湾（胡弓）」が、本作の描写に生かされている。そのほか、「上海游記」の「南国美人」に、次のような節がある。

「その一人の洛娥と云うのは、貴州の省長王文華と結婚するばかりになつていた所、王が暗殺された為に、今でも芸者をしてると云う、甚薄命な美人だった。これは黒い紋緞子に、匂の好い白蘭花を挿んだきり、全然何も着飾っていない。その年よりも地味ななりが、涼しい瞳の持ち主だけに、如何にも清楚な感じを与えた。」

ここで取り上げた王文華は貴州の省長ではなく、貴州興義系軍閥の「新派」の中心人物である。五四運動前後、王は「旧派」とは違って、革命を支持する姿勢を示していた。<sup>⑩</sup> 「旧派」の利益を損害した王は、一九二一年三月一六日上海一品香旅館の門で射撃され、当日の夜死去した。芥川

が上海に上陸したのは、王の亡くなった二二日後である。「玉蘭」と「白蘭花」のイメージ、恋人の他界、芸者をしているところに、玉蘭と洛娥の関連性を見い出すことができる。芥川が玉蘭を造型する際、上海で出会った洛娥のことを再び想起し、参考にしたのであろう。

しかし、「清楚な感じを与えた」「薄命な美人」という洛娥のイメージとは対照的に、玉蘭は野性的、動物的エネルギーを持つ女性として描かれている。妓館の飾りとして、鳥籠に閉じ込められた二匹の栗鼠が珍しいものとしてクローズアップされている。そこに登場した林大嬌が「この部屋の空気と、——殊に鳥籠の中の栗鼠とは吊り合わない存在」としているが、「笑う度にエナメル」のように光る玉蘭の歯並は、「僕」に栗鼠を思い出させる。つまり、鳥籠に閉じ込められた二匹の栗鼠は、抑圧を受けている玉蘭と含芳（特に玉蘭）の象徴として描き出されている。

一方、「格別美しいとは思はれなかつた」という玉蘭に対する第一印象とは違って、半開きの扇をかざした含芳の姿を、典型的な「支那美人」として「僕」は捉えたのである。また、栗鼠のイメージを強く想起させる玉蘭とは違い、含芳は「日かげの土に育つた、小さい球根」を思い出させる。この箇所について、王書偉氏は「動物的なイメージはエネルギーが満ちて、常に動いているのに対し、植物的なイメージは無害で、静かで可愛らしい」と述べ、「動物的イメージは近代的な革命都市の湖南を代表する玉蘭であれば、植物的イメージは古典的な中国を代表する含芳であると言える」と示唆している。<sup>20</sup>ただし、含芳の形象には、「僕」の目に映った「表」と彼女の一連の行為から読み取れる内面があることは看過できない。従来の研究では殆ど注目されていないが、含芳を北京出身と設定するところが重要である。

芥川は大阪毎日新聞社の特派員として、一九二二年六月から七月上旬、約一カ月間北京に滞在した。そこでの旅行体験は「北京日記抄」と幾つ

かの書簡に書き留められている。「上海游记」や「長江游记」などに散りばめられている批判的な描写と作者の焦燥感や嫌悪感が、北京関連の記述には殆ど見られない。「北京はさすがに王城の地だ 此処なら二三年住んでも好い」（一九二二年六月一四日付岡栄一郎宛書簡）、「北京にある事三日既に北京に惚れこみ候（略）北京の壮大に比ぶれば上海の如きは蛮市のみ」（一九二二年六月二一日付室生犀星宛書簡）、「北京は王城の地なり」（一九二二年六月二四日付滝井孝作宛書簡）などの書簡から分かるように、上海ほど近代化が進んでおらず、古典の風物がまだ破壊されていない北京は、芥川を大いに満足させた。北京滞在中、毎日「支那服」の姿で芝居、建築、絵画、書物などを見回った芥川は、存分に古典の中国空間を享受していた。

したがって、〈支那趣味〉に耽溺していた「僕」が、北京出身の含芳から古典の美を見出そうとしたのは自然であろう。一九二三年一月「女性」に発表された「わが散文詩」の「線香」節に、無言、かつ病的で弱々しい北京八大胡同の美しい妓女を登場させた。静止画像のように、動きも少ない彼女の形象は、「僕」の目に映った「子供のよう」で、「病的な弱々しさ」のある含芳像と通底している。しかし、土匪斬首の話聞いた時、「耳環を震わせながら、テエブルのかけになつた膝の上に手巾を結んだり解いたりしていた」含芳の姿は、「手巾」（中央公論）一九二六年一〇月）における子供と死別した母を想起させる。その母と同じように、含芳も仲間を失った苦痛を抑えようとしたのである。また、玉蘭が人血のビスケットを噛み始めたのを見て、手を震わせながら耐える含芳は、恥を忍んで重責を負うような人物であり、決して受動的で弱々しい存在ではない。玉蘭と含芳の形象について、革命者、特に共産党員である可能性が指摘されているが、<sup>21</sup>少なくとも反抗心を持つ人物であることは確実であろう。実際、辛亥革命前後、妓館は革命者同志情報交換の秘密の場所と

して、利用されたことが数多い。また、妓女のなかで、命がけて革命者を保護し、革命に協力した人も多い。代表的な例として、一九一六年袁世凱の脅迫を受けた蔡鍔は、北京雲吉班の妓女小鳳仙の協力を得て、袁の支配から逃げ出し、袁の皇政復活に反旗を翻したことが挙げられる。そのほか、一九一九年五四運動の時、排日運動に参加した妓女もいた。<sup>22</sup>このような中国女性表象、特に含芳の造型を通して、「僕」の期待する古典的・受動的な中国女性像の必然的な崩壊を暗示しているのだと考えられる。

また、「湖南の扇」において、「扇」が作品の冒頭部と結末部に二回登場し、作品のタイトルにもなっている重要なモチーフである。塚谷周次氏は「扇」のモチーフを取り上げ、「湖南の扇」と「女誠扇綺譚」との関連性を考察し、「佐藤の作品においては、扇はエピソードに至る大切な伏線の役をになっているに対して、芥川の場合、扇はいかにも唐突な形で点出されていることである」と述べ、さらに「佐藤作において、中国製の絢爛な扇は、それとして作品の異国趣味を物語る表徴的役割りをになっているとすれば、芥川もまたこの女持ちの扇を点出させることで、玉蘭という妓の残香をとどめようとしたに違いないが、成功しているとは言いがたい」と論じている。<sup>23</sup>

佐藤春夫の「女誠扇綺譚」は台湾を舞台にした作品である。日本人記者の「私」と台湾の友人「世外民」が台湾で遊覧している時、ある廢屋を発見し、近所の老婆からその家主沈家の盛衰と一人娘の悲しい生涯を聞いた。沈家が天災で転落した後、沈女の縁談も破談になった。しかし、彼女は親からもらった「女誠扇」に書かれた「専心」と「一女不事二夫」の倫理を貫き、婚約者を待ち続け、結局発狂し花嫁姿のまま死骸となった。「私」は廢屋を再訪した時「女誠扇」を拾ったが、廢屋で逢曳きをしていた穀物商の下婢に求められ、扇を渡した。その下婢が後、「内地人」

との婚約を嫌って、恋人の死んだ数日後、殉情した。「女誠扇綺譚」を異国情趣の文学とする論が研究者に長く継承されてきた。近年、下婢の死に焦点をあてて、この作品から作者の「植民地台湾の現実と将来に対する強烈な関心」を読み取り、「台湾人下婢の自殺を通して台湾ナショナリズムの誕生を逆説的に宣告した」という藤井省三氏の研究は新たな展開を提示している。「女誠扇綺譚」において、「女誠扇」が象徴する貞淑な恋の主題は、植民地統治とかかわり、ナショナリズムの問題へと転じてゆくのである。したがって、その絢爛な扇は「異国趣味を物語る」というより、「野性によつて習俗を超えた少女」という最後の持ち主の反抗を通して、台湾民衆の反抗と台湾ナショナリズムの台頭を語っている。

また、「扇」のモチーフの関連性から、孔尚任の『桃花扇』も提起できる。一七〇八年に刊行された『桃花扇』は、明朝滅亡という動乱の時代背景で、文士侯朝宗と秦淮の名妓李香君との恋愛悲劇を描いた戯曲である。「扇」は二人が婚約する際、侯が夫婦の契を定めるべく扇に詩文を題し、李にあげたものである（第六齣）。李香君が命をかけて守ろうとした「扇」は、恋の誠を象徴している。しかし、最後まで亡び、崇禎皇帝の法要で再会した二人は喜ぶが、庵主張薇が怒って「桃花扇」を裂いて、地面に投げつけ、「こら、二人のたはけもの奴。よく見ろ。国がどこにある。家がどこにある。君がどこにある。父はどこにあられる。ただ、たかが男女の浮気沙汰。それが醒め切れないとは、何ごとだ。」と一喝する。それで、二人は悟り、情愛の世界から離れ、ともに出家した（第四〇齣）。このように、明の遺民孔尚任が「桃花扇」のモチーフに託したのは、国家の存亡に直面する際、個人のロマティックな情緒の無力さというテーマであろう。裂かれた「桃花扇」は、こうした情緒との決別を示していると理解できる。

「湖南の扇」が発表された二ヶ月後、中国文学、特に古典戯曲を中心に

翻訳した『支那文学大観』が刊行を開始した。その第五巻と第六巻に今東光訳の『桃花扇』が収録されている。その解説を担当したのは、中国明清小説・戯曲の専門家で東京帝国大漢文科の教授塩谷温である。芥川自身も第一巻元曲選を担当していたが、様々な原因で第七巻、第九巻、第一三巻、第一四巻と同じように、刊行できなかつた。ただし、日本近代文学館の芥川文庫に『桃花扇傳奇』（宣統一年刊）全二冊が所蔵され、第一から第四齣まで多くの書き込みがある。それらの書き込みには注釈類があり、また原文の表現を書き直すところもあるなど、そこから作者の編集意識が読み取れる。おそらく、「湖南の扇」を創作する時期、芥川が『桃花扇』を読み、そこから感銘をうけ、「扇」をめぐる創作手法を実践したのではないか。

現に、本作における「扇」のモチーフは、「女誠扇綺譚」と『桃花扇』のそれと類似する側面を持っている。冒頭の部分で、含芳の「扇」が「僕」のエキゾチズムを醸し出す役割を果たすが、「扇」の表象はやがて誰かが置き忘れた「桃色の流蘇を垂らしていた」扇へと変貌していく。また、「無気味」感を抱いた「僕」は、すでに「扇」に関心を向ける余裕がなく、再び譚の顔と彼に抱いた疑問を思い出す。「僕」がかつて持っていた、「扇」に対するロマンティックな想像、あるいは北京式の詩的世界は、激動する現実世界（湖南式の革命の世界）を前にして、すでに無意味なものになってしまう。「扇」の持主であった含芳達も、〈支那趣味〉の言説に作り上げられた古典的な女性像から逸脱し、動乱の世界と階級の抑圧を背負いながら、反抗の情熱を失わず、負けぬ気の強い女性として登場している。<sup>27)</sup>

## 五、終わりに

「湖南の扇」のプロローグで、語り手は歴代の湖南出身の革命者を挙げて、「湖南の民自身の負けぬ気の強いこと」を述べ、「小説じみた小事件」を通して、「情熱に富んだ湖南の民の面目を示す」という主題を提示している。その後、かつての旅行体験を回想し始める。しかし、「僕」の語りは、単に過去の体験を再現するものではなく、むしろ回想を通して、その「出来事」をめぐる謎及び諸人物関係を捉え直そうとしたのであろう。長沙滞在中の芥川が一九二二年五月三一日付滝井孝作宛の書簡で、「長沙は湘江に望んだ町だが、その所謂清湘なるものも一面の濁り水だ。暑さも八十度を越えてゐる。バンドの柳の外には町中殆ど樹木を見ぬ。此処の名物は新思想とチブスだ」と長沙に対する印象を述べている。さらに、「雑信一束」の「六 長沙」において、「往来に死刑の行はれる町、チフスやマラリアの流行する町、水の音の聞える町、夜になつても敷石の上にまだ暑さのいきれる町、鶏さへ僕を脅すやうに「アクタガハサアーン！」と鬨をつくる町」と語っている。長沙の風景に対する失望感や滞在中の焦燥感と不安がそのまま旅行中の「僕」の人物造型に使われたと思われる。また、一九二四年九月「女性」に発表された「長江遊記」において、芥川は以下のように述べている。

しかも国民は老若を問わず、太平楽ばかり唱へてゐる。成程若い国民の中には、多少の活力も見えるかも知れない。しかし彼等の声と難も、全国民の胸に響くべき、大きい情熱のないのは事実である。私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。この国民の腐敗を目撃した後も、なほ且支那を愛し得るものは、顔唐を極めたセシジュアリストか、浅薄なる支那趣味の憧憬者であらう。いや、支

那人自身にしても、心さへ昏んでゐないとすれば、我我一介の旅客よりも、もつと嫌悪に堪へない筈である。……

中国旅行当時の芥川は、同時代の日本人旅行家と同じように、異国情緒を抱き、古典文学に描かれた詩的な古典中国を求めようとした。ただ、その夢が崩壊した後、批判的な目で現実の中国を観察する努力をした。同時に、自分のかつて抱いた〈支那趣味〉を批判的に捉えようとした。中国旅行中の芥川は、常に自意識の中で「日本人」である自己を客体化し、相対化していたのである。本作において回想された「僕」は、まさに批判的に相対化された自己であり、〈支那趣味〉を求めた自己の一面の表象である。

一方、作品の結末部で、四年後の「僕」は当時の心情を回想しながら、「しかし僕の滞在費は——僕は未だに覚えていて、日本の金に換算すると、丁度十二円五十銭だった。」と関心事が日常へと後退する。中国民衆特に湖南民衆の排日運動や関税自主権運動が盛んに行われ、中国におけるナショナリズムの擡頭など、頻繁にマスメディアに取り上げられていた時期に、「僕」は湖南民衆の革命情熱に好意的関心を示し、憧れもありませんながら、激動する時代の流れに積極的に乗ることはできない。複雑な世界状況のなかで、自分にとって確実に把握できるのは、身近なささやかなことしかない。その箇所から、詩的な世界はおそらく永遠に失われているのではないかという芥川の寂しさとやるせなさが読み取れるのではないか。

### 註釈

(本文の引用は『芥川龍之介全集』岩波書店一九九五年～一九九六年による、引用文の傍線はすべて筆者による)

- ① 「新潮合評会 第三十一回(新年の創作評)」(「新潮」一九二六年二月)
- ② 田山花袋が「出来の好い方ではあるまい」、「不足な点も非常に多い」(「一月の小説(九)」(「読売新聞」朝刊 一九二六年一月二日))と批評し、また、宇野浩二は「努力の跡は見えない」と述べている(「報知新聞」一九二六年一月三日)。
- ③ 溝部優実子「湖南の扇——含芳の「扇」を糸口として」(「日本女子大学紀要」四八巻 一九九八年三月 三〇頁)
- ④ 青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説 畢」(「関東学園大学紀要」経済学部編 第一六集 一九八九年二月)、劉耕毓「湖南の扇」論：中国革命との関連をめぐって(「九大日文」一五号 二〇一〇年三月)
- ⑤ 重松一義「日本刑罰史年表 増補改訂版」(柏書房 二〇〇七年七月 一四八頁)
- ⑥ たとえば、一八八三年七月一日「大阪朝日新聞 朝刊」、一九二二年一月二八日「東京朝日新聞」、一九〇二年一月二八日「東京朝日新聞 朝刊」、及び一九〇七年一月七日「東京朝日新聞 朝刊」に掲載された「脳味噌の黒焼き」を梅毒の薬として売る事件。本作が発表される二年前の一九二四年一月二二日「読売新聞」に「半焼の死体から脳味噌を絞す 火葬人夫が母と共に謀 肺患者に売る」という記事が載せられている。
- ⑦ 「人間の首、売買 黒焼きにして売薬」(「読売新聞」一九〇二年二月一日)
- ⑧ 巖安生『日本留学精神史』(一九九一年二月 岩波書店)
- ⑨ 『アジアにおける日本の軍・学校・宗教関係資料 第3期日本留学中国人名簿関係資料第7巻』(龍溪書舎 二〇一四年七月)に収録された抄録版を参考する。
- ⑩ 日清汽船株式会社『日清汽船株式会社三十年史、及び追補』(日清汽船株式会社 一九四一年を参照)
- ⑪ 酒井忠夫『中国民衆と秘密結社』(一九九二年二月 吉川弘文館 二八頁)
- ⑫ 青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説(承前)」(「関東学園大学紀要」経済学部編 第一六集 一九八九年二月 七七～七八頁)
- ⑬ 引用③溝部論 二九頁

- ⑭ 在長沙日本領事館編『在長沙帝國領事館管轄区域内事情』（外務省通商省 一九二四年一三五頁）
- ⑮ 清水稔『湖南五四運動小史』（一九九二年一月 同朋舎 六七頁）
- ⑯ 引用⑬溝部論、三〇頁
- ⑰ 長野朗『支那の土匪と軍隊』（燕塵社 一九二四年 一三〇―一七頁）
- ⑱ 単援朝「芥川龍之介「湖南の扇」の虚と実―魯迅「葉」をも視野に入れて」（『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』二〇〇二年二月 一一四頁）
- ⑲ 『貴州軍閥史』貴州軍閥史研究会著 貴州人民出版社 一九八七年一月 一一―一頁を参考
- ⑳ 王書偉「『湖南の扇』論―黄六一を糸口にして」（『千葉大学人文社会科学研究』三四号二〇一七年三月 九頁）
- ㉑ 引用⑬溝部の論と姚紅「『湖南の扇』論―情熱的な中国女性」（『文学研究論集』二七号 二〇〇九年二月）が挙げられる
- ㉒ 邵雍『中国近代妓女史』（上海人民出版社、二〇〇六年八月、一四三頁）
- ㉓ 塚谷周次「『湖南の扇』論考―芥川龍之介晩年の位相」（『日本文学』一一号 一九七二年一月 五八頁）
- ⑳ 藤井省三「大正文学と植民地台湾―佐藤春夫「女誠扇綺譚」」（『台湾文学の百年』東方書店 一九九八年五月 九三頁）
- ㉑ 佐藤春夫「女誠扇綺譚」（『定本佐藤春夫全集第5巻 創作3』臨川書店 一九九八年四月 一七二頁）
- ⑳ 孔尚仁著 今東光訳『桃花扇』（『支那文学大観 第六巻』支那文学大観刊行会 一九二六年一月 三五〇頁）
- ㉑ 女性の革命志士秋瑾が一九〇四年横浜で、革命派と秘密会党との連携で結成された革命組織「三合会」に入会した際、「白扇」（軍師、参謀）の称号を与えられている（孫江『近代中国の革命と秘密結社―中国革命の社会的研究（一八九五―一九五五）』（汲古書院 二〇〇七年三月 一三七頁））。芥川は中国旅行中、秋瑾の墓にも詣でに行き、その事情を「江南游记」（一九二三年一月一日―二月一三「大阪毎日新聞」朝刊）に書き留めている。

（本学大学院博士後期課程）